旅する女

南風　こまち

幕間1～2　　春の手前で

＊剱礼士　――秋田市・秋田市中央総合病院

　碓氷さんの部屋が吹き飛んで2日が経った。病院に運び込まれた彼女は、肋骨を折った他は顔の一部に軽い火傷や切り傷を負っただけという不死身っぷりで医師を驚かせた。僕は釜田さんの愛車、白いトヨタ・マークⅡに乗せてもらい、退院する彼女を迎えに行くことにした。
「しかし参ったな、ああも建物に穴が開けば商売あがったりだ」
　釜田さんはぼやきながらハンドルを切る。
「商売どころじゃないでしょう。建物も解体しますし、僕も早く別の部屋を見つけないと」
「当たり前だ、あんな建物にいつまでもいられるかよ。保険金は降りるみてえだし、とっとと新しい物件を見つけて新しい店を構えねえとな。幸い、前の建物からそう変わらん場所に空き家がある。そこを改装できねえか不動産屋と交渉しているが、何とかなりそうだ」
「良かったですね、どれくらいの広さなんですか？」
　赤信号で停車する。どんよりとした曇り空からは、今にも雪が降ってきそうだ。
「前の店よりは広くなるな、カウンターの他に小上がりも置ける。人を増やさねえとな、碓氷の他にもう一人くらい欲しい」
　信号が青に変わるが、右折レーンにいるためなかなか進まない。
「剱も運転士なんてやめてウチで働かねえか？　碓氷とならうまくやれるだろ」
　釜田さんはからかうようにニッと口角を上げ、僕は軽く苦笑いしながら首を横に振る。
「今の仕事が気に入っているので、遠慮しておきます」
「そうか？　そりゃ残念だ。それにしても、E6のデビューまであと数日か。もう運転したのか？」
「ええ、試運転や乗務員訓練で何度か。今の車両より編成が長いので最初は戸惑いましたけど、E3よりパワーもあるので思いのほか扱いやすいですね。運転席のレイアウトも踏襲されていますし」
「ほう、そりゃいいな」
　ようやく車列が右へと流れ始めた。しかし、僕達の車が曲がる前にまた信号が赤になってしまう。
「しかし、剱としては寂しくなるんじゃねえか？　E3に憧れて運転士になったんだろ？」
「ですね。ですが、立派な後継車ができて彼女も幸せだと思いますよ」
「違えねえ。あれだろ？　新型車両は来年には320キロで走るんだろ？　まさか世界最速の列車が秋田に来るとはな」
「僕も体験するのが待ち遠しいですよ」
　歩行者信号が点滅を始める。もうそろそろ信号が青になるだろうか。
「それはそうと、碓氷の奴は大丈夫かねぇ。くたばらなかったのは良かったが、彼女の部屋に爆発物が仕掛けられていたって噂じゃねえか」
「どうでしょうね……」
　また信号が青になる。しかし、対向車の列が途切れることなく続き、右折できないまま足踏みが続く。
「剱、何か心当たりはねえのか？」
「僕に聞かれても困りますよ」

一瞬、かつての彼女の姿が脳裏をよぎる。……そうか、もうすぐ2年になるのか。今でも時折、言いようのない違和感と共にふと蘇るあの光景。
関係ないだろう。僕の記憶を振り払うようにようやく車は右折することができた。
「碓氷が誰かの恨みを買うような人間にはとても見えねえんだがなぁ……そういや剱、退院祝いはどうする？」
「とりあえず、碓氷さんの好きな一乃穂のおせんべいは買ってきました」
「上等だ、花なんて食えねえし場所を取るだけだ。だが、彼女も気に病むかもしれねえ。もっとこう、ぱーっとできるもんねえか？」
車は線路との立体交差で渋滞に引っかかる。ちょうど真上の線路を〈こまち〉がゆっくりと走っていく。走る彼女を運転できるのは、あとどれくらいなのだろうか。
「どこか旅行にでも連れていきませんか？　退院祝いというより、新装開店祝いとか完治祝いとか理由付けはいくらでもできますよ」
理由なんてどうでもいいから彼女と旅に出たい、とまでは口にできなかった。でも、彼女がいなくなるかもしれないという現実は、たった数時間で杞憂に変わったとはいえ、今も心のどこかを鷲掴みにして離さない。
「そりゃいいな、名案だ。行先はどうする？」
「時期的に初夏になるでしょうし、北海道とかいいかもしれませんね。追々詰めましょう」
車列が動き出し、釜田さんはそっとアクセルを踏む。立体交差をくぐり抜けてしばらく直進すると、年季の入った病院の建物が見えてきた。
「新病棟もだいぶ出来上がってきたな、4月に運用開始だったか？」
「どうでしたっけ、調べてみましょうか」
ポケットからスマホを取り出し、検索をかける。最近は検索上部にも広告が出るようになってきていて、今日は『震災から2年　今こそ助け合いの心をかたちに』と寄付を募る広告が出てきた。すぐに病院のホームページが出てきた。
「使用開始は5月からしいですよ、旧病棟の解体は6月から始めるとか」
釜田さんは一つ頷いて、ウインカーを点ける。病院のロータリーに入る。降り始めた雪の向こう、額に包帯を巻いた碓氷さんの姿が見えた。
助かって良かった、生きていてくれて良かった。僕は堪え切れない笑顔を隠さず、速まる胸の鼓動を隠せず、車のドアを開けた。
「おかえりなさい、碓氷さん」